

1. 本研究の目的

本研究の目的は、土製耳飾、土製垂飾、土玉及び土製勾玉、玉象嵌土製品、環状土製品の5つの土製装身具について北日本における地域的展開を明らかにすることである。

各土製装身具の先行研究における課題として、①北東北での研究例が少ない、②各遺物の定義が明確でないの2点が挙げられる。器種ごとにみると、①北東北での研究例が少ない、について土製垂飾、土玉及び土製勾玉は石製の研究に付随されることが多く、土製品主体で研究例が少ない。また、研究されたとしても古墳時代以降のものが多い。後者の②各遺物の定義が明確でない、については土製垂飾、土玉及び土製勾玉の分類は、細部の特徴で垂飾、小玉、平玉と多様に名称付けられるため、報告書によってこれらの遺物の境界が曖昧な部分がある。玉象嵌土製品は出土例の少なさから、所属時期、地域性、性格や用途について検討が大きく分かれている。環状土製品は用途を断定する共伴例がないため、先行研究が少ない、ことが挙げられる。

2. 研究方法

北日本の各資料の集成を行うとともに、資料が多出している遺跡の検討を通じて、各器種の時空間的まとまりを把握することにした。今回分析対象としたのは、五月女菴遺跡から出土した土製装身具358点（土製耳飾は25点、土製垂飾は20点、土玉及び土製勾玉は296点出土し、玉象嵌土製品は1点、環状土製品は16点）である。

五月女菴遺跡は後期後葉～晩期後葉を主体とする複合遺跡で、青森県五所川原市相内に所在する。過去3回に渡って実施された調査を通して、五月女菴遺跡の墓域には祭祀施設を構成するさまざまな要素の遺構が発見された。これらの遺構から出土した遺物を分析することで縄文晩期の社会構造について理解が進むと予測される。また、五月女菴遺跡が帰属する後期後半～晩期中葉は、土製耳飾の多様化から衰退への移行期、土製垂飾、土玉及び土製勾玉の多様化の時期、玉象嵌土製品が製作並びに使用された時期にあたる。

研究方法として、まず各遺物の分類基準を定め、形態分類を行った。分類は以下の通りである。なお、北東北の土製装身具の集成時に追加した分類を太字のゴシック体で記載した。

(1)土製耳飾の分類

I類：白形で、断面形態が上部と下部が僅かにくぼんでいる

I1類：穴のないもの

I2類：穴のあるもの

- Ⅱ類：滑車形で、両端の長さの差があまりない
 - Ⅱ1類：穴のないもの
 - Ⅱ2類：穴のあるもの
- Ⅲ類：滑車形で、Ⅱ類と比べ両端の長さの差が大きく楕形に近い
 - Ⅲ1類：穴のないもの
 - Ⅲ2類：穴のあるもの
- Ⅳ類：栓棒形
 - Ⅳa1類：穴のないもの
 - Ⅳa2類：穴のあるもの
 - Ⅳb1類：キノコ形に近く、穴のないもの
 - Ⅳb2類：キノコ形に近く、穴のあるもの
- Ⅴ類：漏斗形をなしているもの
- Ⅵ類：内側をえぐり、椀を伏せたような形態をなすもの
 - Ⅵ1類：穴のないもの
 - Ⅵ2類：穴のあるもの

(2)土製垂飾の分類

- Ⅰ類：牙形をなしているもの
- Ⅱ類：柱状をなしているもの
 - Ⅱa類：楕円形
 - Ⅱb類：棒形
- Ⅲ類：円盤形をなしているもの
- Ⅳ類：分銅形をなしているもの
- Ⅴ類：十字形をなしているもの**
- Ⅵ類：Y字形をなしているもの**

(3)土玉及び土製勾玉の分類

- Ⅰ類：丸玉。球形、円形、平形を呈するもの
 - Ⅰa類：小玉。主に球形、円形を呈するもの
 - Ⅰb類：平玉。平形を呈するもの
 - Ⅰc類：そろばん形。菱形や算盤玉に近い形のもの
- Ⅱ類：管玉。管状を呈するもの
 - Ⅱa類：純粋な管状を呈した管玉
 - Ⅱb類：棗玉。側面が中脹らみしているもの
 - Ⅱc類：装飾付管玉**
- Ⅲ類：土製勾玉。湾曲しており、上部に一孔が有るもの

- Ⅲa 類：牙形。歯牙の形を呈するもの
- Ⅲb 類：くし形。櫛のように湾曲しているもの
- Ⅲc 類：L 字形。L 字のように湾曲しているもの
- Ⅳ類：異型玉。装飾性が有り、またⅠ～Ⅲ類の中にあてはまらないもの
- Ⅴ類：花形。沈線などの施文により花のように見えるもの**

(4)玉象嵌土製品の分類

- Ⅰ類：板状を呈するもの**
- Ⅱ類：弓状を呈するもの**
- Ⅲ類：棒状を呈するもの**

(5)環状土製品の分類

- Ⅰ類：貝輪形を模しているもの
 - Ⅰa 類：施文されていないもの
- Ⅱ類：ドーナツ形を模しているもの
 - Ⅱa 類：施文されていないもの
 - Ⅱb 類：沈線が施されているもの
 - Ⅱc 類：刺突が施されているもの
- Ⅲ類：円筒形を模しているもの
 - Ⅲa 類：施文されていないもの
 - Ⅲb 類：沈線が施されているもの
- Ⅳ類：菱形を模しているもの

分析について、土製耳飾は付け替えの段階を見るために、最大径と個数の比較を行った。土製垂飾の形態ごとの大きさ関係を見るために、長さ、幅、重さと個数について検討した。土玉及び土製勾玉については大きさと形態の割合を見て、意図的な使用意義の有無について分析した。玉象嵌土製品については出土点数が少ないため、他の地域と形態の比較を行った。状土製品の各形態の最大径と内径の分布図を作成し、大きさの傾向についてまとめた。

さらに、北東北の集成を行い、時代ごとの変遷、形態、出土状況による地域差などについてまとめ、装身具からみた五月女菴遺跡の位置づけを行った。

3. 結果

(1)北東北の土製装身具の変遷

まず、北東北の土製耳飾 1157 点、土製垂飾 88 点、土玉及び土製勾玉 593 点、玉象嵌土製品 38 点、環状土製品 253 点の集成を行った。その結果から、各遺物の大まかな変遷をた

どる。

土製耳飾は、早期から前期は粗雑なつくりの臼形や栓棒状の耳飾が出現する。中期からは小型の滑車型耳飾が出現し、後期になるに連れて大型化していく。後期後半から晩期初頭では、大型の滑車型耳飾りが大半を占め、複数の形態が同時に出土する盛行期に該当する時期である。また、後期後葉から晩期初頭では、刺突や沈線の他に三叉文など特徴的な文様モチーフが施される傾向にある。晩期後葉になると土製耳飾の出土はみられなくなる。

土製垂飾は中期から出現する。後期から晩期にかけて最も形態が多様化する。文様は刺突や沈線や縄文が施される。土製垂飾の特徴として、同遺跡内では分類ごとの形、大きさの差はあまりないが、他遺跡と比較を行うと様相は大きく異なっている。

土玉及び土製勾玉は、前期から晩期にかけて普遍的に小玉、平玉が出現する。特に後期に多く、河川沿いまたは海岸沿いに分布する傾向にある。中期からは管玉、棗玉、装飾付管玉が出現する。後期になると土製勾玉、異形玉が出現する。土製勾玉は大きさ、施文に大きな変化はみられない。後期後半から晩期後半は花形玉が出現し、土製勾玉同様な形態に変化はみられない。

次に玉象嵌土製品について述べる。この遺物については先行研究とほぼ同様の結果が得られた。玉象嵌土製品は後期～晩期の土製品で、特に晩期中葉～後葉(聖山Ⅰ～Ⅱ式、大洞C2～A式期)にかけて出現する。主に津軽半島先端から渡島半島に分布しており、類似品は津軽半島以南に分布する傾向にある。

最後に環状土製品について述べる。この遺物についても先行研究とほぼ同様の結果が得られた。前期から晩期にかけて出現し、特に後期の北上川流域に多く分布する傾向にある。ドーナツ形は前期から晩期にかけて出現する。前期から中期初頭までは無文の環状土製品が主流で、中期中葉頃になると刺突と沈線が施されるようになる。中期中葉になると筒形が出現し、北上川流域の半数以上の環状土製品はこの形態である。文様構成は十腰内Ⅰ式に共通しており、隅の丸い四角形や渦巻状の施文がされる。中期後半からは菱形が出現し、石製品の中に類似品がある。また、赤色顔料の付着した環状土製品はみつかっておらず、他の土製装身具と異なる点である。

(2) 五月女菴遺跡の土製装身具の位置づけ

次に、五月女菴遺跡の土製装身具の分析と、位置づけについて述べる。

土製耳飾は、Ⅰ1類3点、Ⅱ1類2点、Ⅱ2類9点、Ⅲ1類2点、Ⅲ2類3点、Ⅳa1類1点、Ⅳa2類2点、Ⅳb1類1点、Ⅳb2類1点、Ⅴ類：1点出土した。最大径のピークは21～22mmと11～14mmの範囲にあり、この2つのピークは付け替えの第1段階に該当している。第1段階の土製耳飾は、ほぼ全ての遺跡で確認されており、成人式等の通過儀礼に関わるものと考えられる。

土製垂飾はⅠ類1点、Ⅱa類5点、Ⅱb類3点、Ⅲ類1点、Ⅳ類5点出土した。破片が多いため他類例との比較が困難であるが、分銅形は九年橋遺跡の土製垂飾と同様の大きさで

ある。

土玉及び土製勾玉は、Ⅰa類 103点、Ⅰb類 84点、Ⅰc類 1点、Ⅱa類 19点、Ⅱb類 32点、Ⅲa類 18点、Ⅲb類 14点、Ⅲc類 15点、Ⅳ類 7点出土した。土製勾玉は 40 点以上出土し、これは他遺跡では石製勾玉の使用が主流であるためと考えられる。重さの傾向は、土製勾玉類は大きさ、重さ共に散らばった傾向にある。玉類、管玉類、異形玉類については各形態に一定の大きさが集中的に分布しているが、小型が多く大型になるにつれて個数は減少する。

玉象嵌土製品は棒状を呈したものが 1 点出土した。形状に着目すると第二の道具に近いが、象嵌穴数と類似品に着目すると、装飾品であるとも考えられる。玉象嵌土製品は出土地域、出土時期が限られているため、今後の発掘調査や他地域の研究によって類例が見つかることを期待したい。

環状土製品はⅠa類 1点、Ⅱa類 9点、Ⅱb類 4点、Ⅱc類 2点出土した。内径をみると 0.5~2cm と 14cm 前後であり、腕輪として使用するには小さすぎるまたは大きすぎる。そのため、腕輪の用途は不適切であると考えられる。

また、各遺物の出土状況から集中部 A、集中部 B を定めた。この集中部を該当する遺物を他の遺跡にも同様の出土例があるか比較を行った。集中部 A・B 共に各個々の遺跡全体では該当する遺物があるが、各遺物の出土場所をみると対応する遺物はない。そのため、集中部 A・B の出土状況は五月女菴遺跡の特徴であると考えられる。

4. 考察

今回、土製耳飾、土製垂飾、土玉及び土製勾玉、玉象嵌土製品、環状土製品を集成し、分析を行うことによって大まかな時期的、空間的分布が明らかになった。また、各遺物間にいくつかの関連性を簡潔にまとめると以下の通りである。

- ① 後期後半以降は各遺物が盛行期に入り、多種多様な類型がみられる
 - ・土製耳飾はⅣb類とⅥ類、土玉及び土製勾玉はⅤ類というように新しい類型が出現する
- ② 土製耳飾及び玉象嵌土製品は後期後半になると三叉文などの当該期に特徴的な文様を施すようになる
- ③ 全時代を通して各遺物の各分類がまんべんなく出土するというより、1~2 の形態が集中的に出土する例の方が多い
 - ・北上川流域北部では筒形の環状土製品、北上川流域南部では平玉を中心とした土製玉類が多い
- ④ 環状土製品のみ全時代を通して赤色顔料の付着はみられない
- ⑤ 玉象嵌土製品及び環状土製品は装身具として使用されたとは限らない

上記については、各遺物の装身具類なのか祭祀遺物類であるのかといった用途の違い、今回分析対象外とした他遺物との関連性、社会構造や儀礼行為などの諸要素が関係し合っ

でもたらされたと考えられる。

5. 今後の課題

今回 5 つの土製装身具について集成、分類、分析を行ったが、青森県、秋田県、岩手県の資料の収集のみであるため、北海道の資料の収集を行い、北東北の土製装身具の地理的変遷、時代的展開を検討が必要である。また、分類については、文様やサイズ、断面形、出土状況、共伴遺物、製作技法などの諸属性を加えた研究がなされるべきである。土製垂飾、土玉及び土製勾玉などの土製装身具は、石製品の模倣品という可能性があるため、該当する石製品との対比が必要である。